

プラジュニャーカラグプタの悲愍修習論 (1)

岩田 孝

世尊は法を説き有情を救済された。それは、有情に対する慈悲の故である。慈悲が仏教実践の根本たることの所以はここにある。仏教の慈悲に関しては、種々の視点から研究がなされてきた。更に、最近では、文献学的な研究成果も上梓されている⁽¹⁾。筆者は、後期大乘仏教の仏教論理学派が悲愍⁽²⁾の実践の可能性をどのように証明したのかについて若干の考察を行ってきた⁽³⁾。その考察を補う文献学的な研究の一環として、本稿では、法称 (ca 600-660AD) の著作『知識論評釈』(Pramānavārttika = PV) に対するプラジュニャーカラグプタ (Prajñākaragupta, 八世紀後半) の注釈『知識論評釈莊嚴』(Pramānavārttikāṣṭkāra = PVBh) の一節を和訳し、プラジュニャーカラグプタの悲愍についての見解を分析する。

法称は、PVにおいて、悲愍による世尊の説法を、次の様な文脈に組み込んでいる。有情救済の為の四諦の説示は、未知であった事柄の開示であり、しかも、欺誤のないものである。未知の開示と無欺誤なる二条件を具備する知が認識根拠 (pramāṇa, 量) である。従って、この二条件を具備する世尊は量に例えられる。そして、この世尊の量性を能証する要因 (sādhana) は、世尊が悲愍 (karuṇā) を有することである、と法称は論じている。プラジュニャーカラグプタによると、悲愍は次の如く定義される。「その (悲愍) とは、他者 (有情) が苦の原因 [である渴愛を離れ]、同様に、苦を離れることを願うことである⁽⁴⁾」。抜苦の願としての悲愍こそが世尊の量性の根本的能証要因である、と仏教論理学派は定説するのである。

(1) Franco 1997; Lambert Scmithausen, *Maitrī and Magic*, Wien 1997; Mudagamuwe Maithrimurthi, *Wohllwollen, Mitleid, Freude und Gleichmut*, Stuttgart 1999.

(2) アビダルマの定義では、他者の利益を願う概念として、慈 (maitrī) と悲 (karuṇā) を列挙する。慈は、有情に対して楽を与える心的作用であり、悲は、有情の苦を除く心的作用である (see AK VIII 30a'b, AKBh 453,3; 岩田2002, n.5)。仏教論理学派では、大方、与楽の慈ではなく、抜苦の悲が論題となり、karuṇāなる語と同義の語として、krpā, dayāなどの語も用いられている。これらの心的作用を以下では「悲愍」と訳すことにする。

(3) 岩田2002、及び、それを増補した英文論文 Iwata (Compassion) 参照。仏教の慈悲に関する諸研究については、岩田2002 参照。

(4) See PVBh 53,11: duḥkhaheṭo tathā duḥkhād viyogecchā parasya yā / sā krpā (稲見1997, 17, n.4; 岩田2002, 138に和訳、PVBh 53,6-82,31は、Franco 1997, 159ff.に英訳); PVV 20,10f.: "duḥkhād duḥkhaheṭo" ca samuddharanakāmatā karuṇā ("duḥkhāduḥkha° PVV1) (稲見1997, 11に和訳)。

抜苦を願う悲愍は、生死を繰り返した多くの生存において修習すること (abhyāsa) により体得される⁽⁵⁾、と法称は説く。しかし、悲愍の修習に関しては問題がないわけではない。次の反論⁽⁶⁾が出されるからである。心は身体に依存しており、身体の滅と共に、心も滅するので、その心を抛り所とする悲愍も滅することになる。従って、悲愍を多生において修習することは、不可能である、との反論である。これに対して、法称は、PVの第二章 (= PV II) の第34偈以降において、心が身体を抛り所とする説を否定し、心相続の存在を説いている。即ち、心が各刹那に変化しつつも、直前の刹那の心が、次の刹那の心の質料因となり、直前の刹那の心と同類の心を次の刹那に生起させる、この様にして各刹那の心が連続する、という意味での心相続が存在することを自説とする⁽⁷⁾。更に、PV II 120-131ab では、生死を繰り返す輪廻においては、悲愍の思いは、この心相続を抛り所にして生じて作用し、修習により順次高まる、その結果、悲愍は、止住することなく増長し、心の究極的な本性に至る、と説いている (see PV II 126, 129)。プラジュニャーカラグプタは、この法称説を踏まえて、既に PV II 34a の一つの解釈として、悲愍は、心の体 (本質) を抛り所にするので、修習が可能であり、その修習により、悲愍は殊勝状態に至る、と解説している⁽⁸⁾。

PV II の注解者の中で、この悲愍の増長説を最初に論理的な方法で記述したのは、デーヴェーンドラブッディ (Devendrabuddhi, 七世紀後半) である。彼は、注釈 (Pramāṇavārttikapañjikā = PVP) において、悲愍が人の本性となることを導く論拠として、悲愍が心の特性 (manogūṇa) であることを用い、二つの論証式を構成する。別稿にて示した如く⁽⁹⁾、その第二番目の洗練され

(5) PV II 34: sādhanam karuṇābhyāsāt sā buddher dehasaṃśrayāt // asiddho 'bhyāsa iti cen nāśraya-pratiśedhatah // (「[世尊の量たることを] 能証する要因は [世尊の] 悲愍である。その (悲愍) は [多生における] 修習による。もし [それに対して] 心は身体を抛り所とするので、[しかも、身体の滅にて心も滅するので、悲愍の多生における] 修習は成立しない、と [反論] するならば、[それは正しく] ない。[身体としての心の] 抛り所は否定されるから」)。木村 1981, 61, 稲見 1997, 11f., Franco 1997, 159 に訳される。PV II の偈文番号は、Vetter 1990 に従う。なお、前半偈文は、プラジュニャーカラグプタによると次の様にも解釈される。「[世尊の量たることの] 能証は、悲愍の修習によって [成立する]。その [悲愍] は、心の体 (本質) を抛り所とするので [修習を伴うと、殊勝状態への最高の進行を達成する]」、see PVBh 53,8f.: tasya prāmānyasya sādhanam kuto bhavati. karuṇābhyāsāt, sā ca karuṇā budher dehasaṃśrayāt. buddher yo dehas tadāśrayāt sā karuṇābhyāsaparikarā parām prakarṣagatim āśādayati (Franco 1997, 160, 稲見 1997, 注9; 岩田 2001, 58f. に訳出)。

(6) PVV 20,18ff. などの注釈によると、反論者は、チャールヴェーカーで、心が身体に依存する、と主張する。その論拠は、次の如くである。心は、身体より生じた結果 (kārya) であるから、身体有能力 (śakti) を本性とするから、身体属性 (gūṇa) であるから、身体に依存する。これらの主張は、生井 1996 (37ff.) による Bārhaspatyasūtra A5 に大方対応する。Bārhaspatya の思想の梗概については、生井 1996, 1ff. 参照。

(7) PV II 35-119 参照。これらの偈文の翻訳と解説については、木村 1981, 62ff, 木村 1998, 189ff., 稲見 1997, 12ff., Franco 1997, 166ff. 等参照、また、法称の心相続説については、Tilmann Vetter, *Erkenntnisprobleme bei Dharmakīrti*, Wien 1964, 20ff.; 生井 1996, 69ff. など参照。

(8) PVBh 53,8f., 注5 参照。

た論式の骨子は次の如くである。

悲愍は、修習によって特殊となる心の特性である。それ故に、悲愍は、順次に十全に修習されると人の本性となる⁽⁹⁾。

この論証式を以下の如く略記する。なお、A: (X → Y) なる略式で、A は証明されるべき主題を示し、(X → Y) は、論証因である X が所証特性である Y に包摂される論理的関係を示し、コロンは、その包摂関係が主題に適用されることを示す。

大悲愍：(修習にて特殊となる心の特性たること → 十全修習にて人の本性となること)

この論証での論証因を単に「心の特性」とせずに「修習にて特殊となる」という限定を付したのは、「心の特性のみ」という論拠からは、悲愍が人の本性にはならない、との反論を論破するためである。

同様に、ブラジュニャーカラグプタも、悲愍が制限なく増進することの論理的証明を試みている。その制限なき増進の論拠として、悲愍が心の優れた特性であるという意味で、「悲愍が特殊な性質 (特殊性 *viśeṣa*) であること」を用いている。つまり、およそ特殊性なるもの、それは、修習を重ねると、制限なく増進する、という考え方を基本としている。本論においては、この悲愍の増長説が PVBh においてどの様に理論的に整備された形で記述されているのかを考察する。

PVBh の刊本 (=R) には、誤植や誤読が多く、それらを訂正するために、西蔵語訳を参照し、また、PVBh に対するヤマーリ (Yamāri) の注釈 (PVBhT(Ya)) 及び ジャヤンタ (Jayanta) の注釈 (PVBhT(Ja)) を参考にした。更に、PVBh の内容を理解するために、ラヴィグプタ (Ravigupta) の注釈 (PVT(R)) をも参考資料とした。

悲愍の増長説に対して、「心の特性 (*manoguṇa*)」ということだけから、人の本性になることはない、という反論が予想される⁽¹⁰⁾。悲愍は、心の特性であり、心の優れた特性、心の特殊な性質 (特殊性 *viśeṣa*) である。ブラジュニャーカラグプタは、反論者をして、この特殊性に着目さ

(9) デーヴェーンドラブッディによる悲愍の究極的増長説の分析については、岩田 2007, II 参照。

(10) See PVP 58b3-5 (岩田 2007, II.1 に和訳)。なお、この論証因「心の特性であること」により、智慧 (*prajñā*) なる心的作用が殊勝の極み (*prakarṣaparyanta*) に至り得る、という論証式は、TSP にも見られる。「およそ心の特性なるものは、修習が卓越すると殊勝の極みに至ることが可能である。例えば、バラモンである苦行者に存する残酷さの如し。そして、智慧は心の特性である、[それ故に、智慧は殊勝の極みに至り得る] という [論証での論証因は] 自性論証因である」(TSP 1077,20-22: *ye ye manoguṇāḥ, te 'bhyāsātīśaye sati sambhavatprakarṣaparyantavṛttayah, yathā śrotriyajōḍḅganairghṛnyam (read:°jōṭiṅga°). manoguṇaś ca prajñeti svabhāvahetuḥ*).

(11) 心の特性であるもの、修習によって特殊となる心の特性であるものは、必ずしも、人の本性とはならない、つまり、この論証での「修習にて特殊となる心の特性たること」という論証因は不定因である、と反論者は論難する、see PVP 58b5 (= D 51b7-52a1, ad PV II 120): *gal te goms pas žes bya ba la sogs pas ma űes pa'i (anaikāntika) dogs pa bsu ba yin te /.*

せ、或るものが、特殊性であるというだけで、制限なく増進する、ということはない、と反論させている。例えば、跳躍を例にすると、人は、修練により、より高く跳躍することができる。この跳躍は、身体に属する一つの特長である。しかし、修練を重ねても、無限に高く跳躍することはできない。その如く、悲愍も制限なく増進することはない。これが反論の趣旨である。プラジュニャーカラグプタは、こうした反論を批判する為に、悲愍が制限なく増進することを導く場合に用いる「心の特性」「特殊性」なる論拠は、跳躍などの特殊性とは異なる、と答える。即ち、悲愍の増進性を導く論拠は、単なる「心の特性」「特殊性」ではなく、以下に示される如く、更に二つの条件が付加される限りでの「心の特性」「特殊性」であり、一方、跳躍などの特殊性は、その二条件を欠いている。後者の特殊性は、自らの在り方を連続的に可能にするという意味での自性 (svabhāva) ではない。このことを以下に述べる。

(PVBh 105,32, MS. 44a7) 修習 (abhyāsa) があるとしても [つまり悲愍や智慧などの心的作用は心の特性 (manoguṇa) であり、そうした心の特性を輪廻の間に修習することが可能であることを認めるとしても]、[その修習により] それ (心の特性) はどうして究極的な殊勝状態に至るのか (atyantaprakarṣaṇiṣṭha)。何故ならば、[増進に関して] 僅かな程度を有した (kimcinmātra) 特殊な性質 (特殊性、viśeṣa) が [修習により心に生じると] 経験的に知られるからである。[それは] 恰も、[身体の特長としての] 跳躍 (laṅghana) [が、増進に関して或る一定の僅かな程度を有した特殊性であり、それが修習により生じるが如く、また]、水の沸騰 (udakatāpa) [が、水にとって、一定の程度を有した特殊性であり、それが熱する作用により生じる] 如くである。それに対して [定説者は] 答える。

もし [他者が次の如く反論するならば、即ち] 修習によって [悲愍や智慧などの優れた特性としての] 特殊性 (viśeṣa) が [生じる] としても、[その特殊性は、一定の限度をもって作用する] 自性 (svabhāva) を決して越えることはないはずである。[それは] 恰も [身体に具わる特長である] 跳躍や水 [にとって] の沸騰が [一定限度をもって増進する自性を超えない] 如くである⁽¹²⁾ [と反論する] ならば、[それに対して定説者は答える。] それ (特殊性) が [努力などの外的要因により] 形成される (āhita) というならば、[その特殊性が更に作られる為には、その特殊性は] 更なる努力に依存することになる (punaryatnam apekṣeta)⁽¹³⁾。[恰

(12) シャーキャブッディによると、跳躍を例にして、心の特性であるからといって、必ずしも究極的な増長に至ることはない、と反論する敵者は、クマーリラ (Kumārila) であり、その典拠は Brhātṭikā からの次の偈文である。PVT(Ś) 142a4 [ad PVP 58b7, PV II 120] = TS 3167: daśahastāntaraṃ vyomno yo nāmotplutya gacchati / na yojanam asau gantum śakto 'bhyāsaśatair api // (稲見1986, 141に和訳)。

(13) See PVP 59alf.: de byas pa na yañ yañ bya ba'i phyir / "bad rtsol la yañ ltos" (D 52a4; bltos P)

も跳躍は更にそれがなされる為には、更なる努力に依存する如くである。] また、[或る特殊性が] 安定した拠り所を有しない (asthirāśraya) ならば、[水にとっての沸騰という特殊性の場合の如く、その] 特殊性は決して [究極的殊勝状態に至るまでは] 増長しないであろう (viśeṣo naiva vardheta)。[即ち、程度の限定された形で増長するであろう⁽¹⁴⁾。つまり、水は沸騰すると蒸発する。従って沸騰は、水なる拠り所を欠く。しかも、沸騰は、増進しても、燃焼に至るほどまでに究極的に増進することはない。] しかし、その様な [他に依存した、任運に作用して (svarasavāhin) いない特殊性] は自性ではない (svabhāvaś ca na tādrśaḥ)⁽¹⁵⁾。(PV II 120-121)

心の相続に存する特殊性としての悲愍や智慧 (prajñā) などは、心の自性である。定説者は、そうした悲愍は、ひとたび涵養されると、連続的に作用し、順次増進して、究極的殊勝状態に至ると説く。それに対して他者は反論する。他者にとってのその自性とは、それぞれ先行する刹那にあるものと同類なものが後続の刹那に連続して生じるのではなく、その間に異類のものが入り込み (vipakṣasamkīrṇa)⁽¹⁶⁾、その流れが連続しないことである。悲愍はその自性を越えること (svabhāvātikrama) はない。もし悲愍なる特殊性がその異類の混入という自性を越えるならば、定説者の意図する如く、悲愍には異類の心的作用の混入がなく、悲愍は、各刹那に同類なものとして連続して増進するであろう。しかし、実際には、特殊性がその自性を越えることはない、つまり、心の特殊性としての悲愍は任運に作用する (svarasavāhin) わけではない⁽¹⁷⁾、従って、悲

yin te / ⁽¹⁴⁾ punaryatnam apekṣeta なる pratika によれば、yañ 'bad rtsol la ltos となるべきであろう)。

(14) See PVP 59a4 (= D 52a5f.): de'i tshes phyi ma'i khyad par ñid ni mi 'phel na / rnam par gnas pa (*vyavasthita) ñid 'phel bar 'gyur ro žes bya ba'i don to //.

(15) See PVBh 106,13: yaś ca punaryatnāpekṣi sa svabhāva eva na bhavati, PVṬ(R) 204b3f.; PVV 47,19: tādrśaś ca viśeṣo naiva svabhāvaḥ, PVV¹ n.2: ... anyānapekṣatvāt svabhāvasyākāśavat (「自性は、虚空の如く他に依存しないからである」)。即ち、他に依存する様な特殊性は自性ではない (see PVBhṬ(Ya) 171b7f.: yañ 'bad rtsol la ltos (D 150a3; bltos P) pa gañ yin pa de 'dra (tādrśa) žes bya bar sbyar ro //)。また、任運に作用しない (asvarasavāhin) 様な特殊性は、自性ではない、see PVP 59a4 (= D 52a6, ad PV II 121): rañ bñin dag ni de 'dra min / gañ rañ gi ñaṅ gis 'jug pa ma yin te / dper na 'dod chags la sogs pa lta bu'o // (「おおよそ任運に作用しないそうした [特殊性] は自性ではない。例えば、貪 (rāga) などの [煩惱は任運に作用せず心の自性ではない] 如し」)、PVP 59a7f. (= D 52b1, ad PV II 123): ... khyad par 'phel ba yin na'añ / ... rañ bñin min phyir (asvabhāvātīvāt) te de ñid rañ gi ñaṅ gis 'jug pa med pa ñid kyi phyir (see 岩田 2007, II.1)。従って、定説者にとっての自性とは、他に依存せず、任運に作用するものである (see PVBh 106,19; PVṬ(R) 205a2)。

(16) See PVV 47,9f.: svabhāvasya krpādes tadvipakṣasamkīrṇatvasya (「[他者にとっての] 自性、即ち、悲愍など [の相続] がそれ [自身] とは異類のものによって混入されること」)。

(17) See PVP 58b5f. (= D 52a1): rañ bñin las 'das te / rigs mi mthun pa (P; om D) las 'das pa rañ gi ñaṅ gis 'jug pa'i mtshan ñid can sñiñ rje la sogs pa'i bdag ñid du 'gyur ba (D; gyur pa P) min (D; yin P) no // (「[特殊性が] 自性を越えること [はないはず] とは、異種類 [の混入] を越えること [はない]、即ち、任運作

愍が制限なく増進することは不可能である、と反論する。例えば、身体の特異性である跳躍は、更なる努力に依存しているので、制限なく増進するわけではない如くである、と。それに対して、法称は、他者の例示した特異性は自性ではない、と答える。プラジュニャーカラグプタは、次の様に説明する。自性とは、他の外的原因に依存せずに任運に作用するものである、従って、その様に他に依存し、増進の程度の限定された様な特異性は、自性ではない、と。

ここで、プラジュニャーカラグプタは、身体にある跳躍としての特異性や、水にとっての沸騰としての特異性が、或る一定の程度にしか増進しないことの原因を分析する。その分析を介して、何故に悲愍などには、跳躍などの場合と異なり、制限される様な増進がないのかを理論的に証明する。

まず、他者の例示した跳躍と水の沸騰の場合に、究極的増進が成立しないことを説明する。

(106,5, MS. 44a8) [更なる努力に依存した特異性（身体の跳躍）には究極的増進はない、そして、安定した拠り所のない特異性（水の沸騰）には究極的増進はないという] このことは何故なのかというならば、[それに] 答える。

それ（以前に増進して得られた、例えば以前の跳躍⁽¹⁸⁾の如き特異性）に対して [のみ] 有効な能力 (śakti) を有する諸能成因 (sādhana) [例えば跳躍のための以前の努力など] は、[その] 後 [に生じる跳躍の如き] 特異性に対しては効力を有しない (asāmarthya) ので [更なる努力に依存する跳躍の如き特異性は究極的に増長することはない⁽¹⁹⁾]。また、[例えば水の沸騰なる特異性の場合、水は、沸騰すると消失する。従って] 常に [沸騰の所属すべき] 拠り所が存続していない (anāśrayasthiti) ので [沸騰の如き特異性は究極的に増長することはないのである]。(PV II 122)

(106,8, MS. 44b1) 実に [或るものが] 特異性 [である] というだけで [そのものが程度] 制限されることのない増進を伴う (<a>vyavasthitotkarṣabhāgin⁽²⁰⁾、というわ

用を特相とした、悲愍などが [人の] 本性となることはないはずである [という意味である]); PVV 47,9f.: svabhāvasya ... atikramo vipakṣāvyavakīrṇasvarasapravṛttakṛpādīmayatā sātmbhāvo mā bhūt ... ([「特異性が」自性を越えること、つまり、[その特異性が] 異類のものによって混入されずに任運に作用している悲愍などからなること [という意味で]、[特異性が心の] 本性となること [それは] ないはずである))。

(18) See PVT(R) 204b5f. (= D 349a6): mchoṅs pa la sogs pa sñar bogs phyuñ ba de ñid la (phan 'dogs par nus pa gañ yin pa de dag sgrub par byed pa rnams te //).

(19) See PVBhT(Ya) 172a2 (= D 150a5): sgrub par byed pa rnams la ... nus pa med pa'i phyir yañ 'bad pa la ltos (D; bltos P) pa'i khyad par 'phel ba ma yin no //.

(20) 悲愍の増長を説く法称説「それら（悲愍など）は... どうして住止しようか [いや、住止しないはずである] (tāsām ... kutah sthitiḥ // 126c'd) での sthiti (住止) が、PVV (48,22) では、sthitir vyavasthitotkarṣatā (制限された増進を有すること) とパラフレーズされているので、vyavasthita は、「[一定の程度に] 制限された」を意味する。当該の箇所文意は、特異性があるからといって、その特異性の増進が、無制限となるわけではない、つまり、[一定の程度に] 制限されない (avyavasthita) わけではない、ということである。従って、vyavasthi-

けではない。何故ならば、[身体の] 跳躍や水の沸騰としての特殊性は、自らの相続 (svasamtāna)⁽²¹⁾ (前時点と同類なものが後続する次々の時点に生じることによって構成される同類のものの流れ) のみが存在することだけで、その様に [増進を伴うという] わけではなく、むしろ、跳躍は、[それが以前の努力によって] 形成されたとしても、[その後の] 更なる努力に依存 (punaryatnāpekṣaṇa) して [はじめて増進する] からである。というのは、跳躍は、以前の努力と跳躍とは別な努力に依存しないこと⁽²²⁾はなく、同じ以前の場所において (prāgdeśa eva)⁽²³⁾ 更なる努力に依存するからである。一方、水の沸騰は、安定した拠り所を有せず (asthirāśraya)、しかも、更なる努力に依存する (punaryatnāpekṣin)⁽²⁴⁾。この (水の沸騰は)、火との結び付きがなくてもある⁽²⁵⁾、というわけではないからである。[もし水の沸騰が火との結び付きなしにあると

ta° (R MS.) を <a>vyavasthita° と訂正する。PVBh(Tib) 117a6 (= D 98b3): khyad par min (pa min P; par yin D) no cog ni bogs 'byuñ ba rnam par gnas pa la brten par 'gyur ba ma yin no // では、北京版に、khyad pa<r> min と 'gyur ba ma yin とに二つの否定詞があり、梵文に二つの否定詞のあること (na ... avyavasthita°) を示唆する。恐らく、khyad pa<r> min の否定詞は na khalu viśeṣa ity eva ... での否定詞 na の誤訳であろう。PVT(R): 204a8 (= D 349a2f.): khyad par zes bya ba rab kyi mthar phyin med par gnas pa'i char gyur pa ni ma yin te / でも、二つの否定詞が付されている。ただし、西藏語訳の文脈では、最初の否定詞 med pa は、rab kyi mthar phyin pa (*prakarṣaniṣṭhā, *atyantaprakarṣaniṣṭhā) を否定している。原文としてはおよそ次の如き梵文が想定されよう。*na khalu viśeṣa ity evāvvyavasthitaprakarṣaniṣṭhābhāgi。また、PVBhT(Ya) 172a3f. でも、反論者は、身体の特異性である跳躍の場合の如く、「およそ特異性なるものは、すべて、[一定の程度に] 定められた増長を有する」(gañ dañ gañ khyad par yin pa de thams cad ni 'phel ba gnas pa can yin te / PVBhT(Ya) 172a3 = D150a6)、「それ故に、それら [心の特異性である悲愍なども]、どうして [程度の一に] 制限されない増長を有することがあろうか」(PVBhT(Ya) 172a4: des na de dag 'phel ba gnas pa med pa ji ltar 'gyur sñam na) と論難する。つまり、反論者は、「特異性であるだけで、制限なく増進する」という説を定説者の説と見なして、制限なき増進は不可と批判するが、定説者は、「特異性のみから制限なき増進あり」とは主張していない、と論駁する。制限なき増進を導くには、特異性に更に限定条件が必要である、と定説者は論じるのである。

(21) PVBh (Tib) 117a6 (= D 98b3): rañ gi rgyud 'gyur ba tsam (svasamtānamātra°) に従って訳した。svasattāmātra° R, MS.

(22) 写本 MS. と刊本 R はそれぞれ pūrvaprayatnalabhyam punaḥprayatnāntaranirapekṣam MS.; °labhyam punaḥ prayatna° R に作るが、Tib 117a7: (mchoñs pa ni) sñar gyi rtsol ba dañ / mchoñs pa dag las gñan pa'i rtsol ba la ltos (D 98b4; bltos P) pa med pa (ma yin no //) に従って訳出した。

(23) Tib. 117a8 (=D 98b4): sñar gyi yul ñid du, PVBhT(Ja) 340a1 (= D 293b5): yul sña ma ñid la により、prāyaśa eva R を prāgdeśa eva と訂正 (prā{pte}'gde?'śa eva MS.)。

(24) See PVV 47,17f.: kvāthyamānaḥ hy udakaḥ kṣiyata evety asthirāśraya udakatāpaḥ punaryatnāpekṣi ca svarasavāhitvābhāvāt (「実に、水は、沸かされると、全く滅尽する。従って、水の沸騰は安定した拠り所を有しない。しかも、[水の沸騰は] 更なる努力に依存する、任運に作用することがないからである」)。

(25) Tib. 117a8 (= D 98b5): me dañ 'brel pa log kyañ de yod pa ni ma yin no //; PVBhT(Ja) 340a2 (= D 293b6): 'di dañ me dañ 'brel pa (D; ba P) med kyañ yod pa ni ma yin no により、asau saṅgatāgnisamparko R; asau saṅgatāgni° MS. を asāv <a>saṅgatāgnisamparko と訂正。

すれば⁽²⁶⁾ それによって、[水の沸騰には、程度の] 制限されない殊勝性があることになろうが⁽²⁷⁾ [実際にはそうではない]。

(106,11, MS. 44b1) 以上により、究極に至る殊勝性を有しないことは⁽²⁸⁾、更なる努力に依存すること (punaryatnāpekṣana) によって [論理的に] 包摂される (vyāpta)、また (ca)、安定した拠り所を有しないこと (asthirāśrayatva) によって [論理的に包摂される]⁽²⁹⁾。[しかし] 心の特性 (manogūṇa)⁽³⁰⁾ である悲愍 (krpā) などには、それ (包摂する方の事柄⁽³¹⁾) がない故に (tadabhāvāt) [つまり、更なる努力に依存することもなく、安定した拠り所を有しないこともない故に]、そして、[その包摂する方とは] 逆のこと [つまり、更なる努力に依存しないことと、安定した拠り所を有すること⁽³²⁾] が可能である故に (viparyayasambhavāt)⁽³³⁾、[悲愍などには、一定の程度に] 制限された増進を有すること (vyavasthitotkarṣatā) はないのである。そして、更なる努力に依存するもの [即ち、任運に作用しないもの⁽³⁴⁾] は、決して自性 (svabhāva) では

(26) See PVBhṬ(Ya) 172a7 (= D 150b2): *gañ las źes by ba ni me dañ 'brel pa log (D; logs P) kyañ gnas pa las so //*.

(27) 刊本 R と MS. は yato 'vyavasthitotkarṣatā に作るが、PVBhṬ(Ya) の pratika (172a6: *gañ las (P; la D 150b1) 'phel ba rnam par gnas pa med par 'gyur la //*) によると、原文には、yato *'vyavasthitaprakarṣatā とあったのであろう。Tib 117b1: *de'i phyir 'phel ba (D 98b5; 'brel pa P) mthar thug pa mi 'gyur ba nid do //* によると、増長の極みに至らないことになろう、という意味になり、増長に限定がないことになろう、という本文の文脈とは逆になる (de'i phyir は yato の誤訳)。

(28) 刊本 R と MS. では、vyavasthitotkarṣatā に作る。しかし、PVBhṬ(Tib) 117b1 (= D 98b5): *'phel ba mthar thug pa ma yin pa ŋid ni ...* に従って訳した。これは PVBhṬ(Ya) 172a7f. にも pratika として引用される。原文は、*apariniṣṭhitaprakarṣatā ? の様に、否定詞を含む合成語であろう。

(29) See PVV 47,24: *punaryatnāpekṣitvenāsthirāśrayatvena vyavasthitotkarṣatā vyāptā.*

(30) 悲愍の制限なき増進性の論拠として、悲愍が心の特性であることは、デーヴェーンドラブッディが既に述べている、see PVP 58b1-5; 岩田 2007, II.1.

(31) See PVBhṬ(Ja) 340a3f. (= D 293b6f.): *de med pa'i phyir ni khyab par byed pa med pa'i (vyāpakābhāva) phyir ro //*.

(32) 悲愍には、包摂する方のもの (努力に依存すること、また、安定した拠り所のないこと) とは矛盾した特性の存することが可能である、とジャンタは説明する、see PVBhṬ(Ja) 340a4 (= D 293b7): *de las bzlog pa srid pa'i phyir źes bya ba ni khyab par byed pa 'gal ba (vyāpakaviruddha) yin no //*. つまり、悲愍には、更なる努力に依存しないことと、安定した拠り所を有すること、という二つの特性が可能になる、see PVBhṬ(Ya) 172a8-b1 (= D 150b3): *bzlog pa srid pa'i phyir ro źes bya ba ni rten brtan pa nid (sthirāśrayatva) la sogs pa srid pa'i phyir ro //*. 恐らく、「それ (包摂する方) がない」という場合には、包摂する方の事柄の純粹否定が意図され、「それとは逆のことが可能」という場合には、否定されるものとは別な、上記の二つの特性の存在を肯定することが意図されているのであろう。

(33) Tib. 117b2 (= D 98b6): *srid pa'i phyir = PVBhṬ(Ya) 172a8* により、°sadbhāvāc R MS. を°sambhavāc と訂正。

(34) See PVBhṬ(Ya) 172b1f. (= D 150b3f.): *... yañ rtsol ba la ltos (D; bltos P) pa gañ yin pa źes bya ba'o //*

ない。一方、この論証因 [つまり、「悲愍が制限なく増進する」という定説を導く、「特殊性」という論証因] は、限定条件を有している (saviśeṣaṇa)⁽³⁵⁾。[つまり] およそ安定した拠り所を有した (sthiraśraya)、しかも、自性 (svabhāva) である [という限定条件の付せられた特殊性が論証因であり]、そうした [特殊性なる論証因] は、[一定の程度に] 制限された増進を有することはない (yaḥ sthiraśrayaḥ svabhāvaś ca, na sa vyavasthitotkarṣaḥ)。例えば、バラモン [から転向した] カーパーリカ (śrotriyakāpālika) の嫌悪 (ghrṇā) [が、心の自性となり制限なく増進する] 如くである⁽³⁶⁾。

反論者は、悲愍が制限なく増進することは不可能であることを示す為に、身体にとっての跳躍や水にとっての沸騰は、究極的には増進しない、と反例を示す。それに対して、法称は、その両方の例は、悲愍が増進することを可能にする条件を欠いている、それ故に、反論者の喩例は、反証する例にはならない、と論破する。つまり、人がより一層高く跳躍する為には、更なる努力が必要である。沸騰の場合であれば、沸騰のためには加熱なる更なる努力が必要である。しかも、水は沸騰すると消えてなくなるので、沸騰なる特殊性の所属するべき拠り所さえ存在しない。この様に、更なる努力に依存するものには、制限された増進が結果として生じる。また、安定した拠り所を有しないものには、制限された増進が結果する。以上を論理的に記述すると次の様になる。

およそ制限された増進を有するもの (vyavasthitotkarṣa) は、更なる努力に依存する (punaryatnāpekṣin)、恰も身体にとっての跳躍の如し。また、制限された増進を有するものは、安定した拠り所を有しないもの (asthiraśraya) である、恰も水にとっての沸騰の如し。

raṅ gi ṅaṅ giś 'jug par mi 'gyur ro ṅes bya ba'i don to //.

(35) ジャヤンタによると、「制限された増進」なる包摂される方 (所遍) の特性を包摂するもの (能遍) は、努力に依存すること、また、安定した拠り所のないことである。その能遍の非存在 (vyāpakābhāva)、又は、その能遍と矛盾する (vyāpakaviruddha) 特性が、限定条件 (viśeṣaṇa) である、see PVBhT(Ja) 340a6 (= D 294a1): **khyad par byed pa daṅ bcas pa ṅes bya ba ni khyab par byed pa med pa'am khyab par byed pa daṅ 'gal ba'o //** 悲愍に制限されない増進のあることを証明するための論証因である「[心の] 特殊性」(viśeṣa) は、この限定条件を伴っている。自性とは、この文脈では、更なる努力に依存しない任運作用と解される (注15 参照)。この自性は、安定した拠り所の有と並列して列挙されるので、安定所依の有とは別な概念と見なされている。なお、PVP (60a2-4, ad PV II 125) では、両方の概念によって自性が成立すると解されている (岩田 2007, II.2 参照)。(36) PVP 58b1-5 (ad PV II 120) にも、心の特性であるものは、十全に修習されると人の本性となる、という包摂関係の例として、バラモンから転向したカーパーリカの残酷さが用いられている (岩田 2007, II.1 参照)。See also PVT(R) 204b4f. (= D 349a5f.): gaṅ brtan pa la brten pa daṅ / ṅo bo ṅid yin pa de ni mthar phyin pa can te / dper na gtsaṅ sbra can daṅ / thod pa can la mi gtsaṅ ba bṅin no //。ここでは、バラモンとカーパーリカの嫌悪が実例となる (なお、Skt. は、PVBh の場合の如く、*śrotriyakāpālika- が想定される。その場合には、「バラモン [から転向した] カーパーリカ」の訳も可能であろう。この訳については、PVSVT 400,10f. (ad PVSV 111,1f.), 岩田 2007, II.1 参照)。

この両者をまとめると、

およそ制限された増進を有することは、更なる努力に依存することによって包摂される、
又は、安定した拠り所を有しないことによって包摂される⁽³⁷⁾。

これの対偶は次の如くなる。

更なる努力に依存しないこと (punaryatnāpeṣṣaṇa) と安定した拠り所を有すること (sthirāśrayatva) は、制限された増進を有しないこと (avyavasthitotkarṣatā) によって包摂される。

この包摂関係は、プラジュニャーカラグプタによると、バラモンから転向したカーパーリカの嫌悪によって例示される。カーパーリカの嫌悪は、バラモンの時より心に存し、心の自性となっていて、努力せずとも生じる、しかも、心を拠り所として有する。従って、その嫌悪は、制限された増進を有しない、つまり、制限なく増進する。この他者にも認められる実例に基づいた包摂関係が、悲愍の制限なき増進を証明する論拠となる。上記の包摂関係を主題である悲愍 (krpā) に適用すると、次の論証式が得られる。

krpā: (punaryatnāpeṣṣaṇa and sthirāśrayatva → avyavasthitotkarṣatā)

心の特性である悲愍は、一度、修習により心に涵養されると、任運に作用する、即ち、心の自性となる。従って、悲愍は、それが更に作用する為に更なる努力を必要としない。しかも、悲愍は、心の相統としての安定した拠り所を有する⁽³⁸⁾。それ故に、悲愍は、制限されることのない増進を有し、殊勝状態に至る⁽³⁹⁾。

(37) See PVV 47,24 (see n.29); PVṬ(R) 204b2f. (= D 349a4, ad PV II 120-122): 'di ltar rab kyi mthar ma phyin par gnas pa'i cha nīd slar 'bad pa la ltos (D; bltos P) pa (*punaryatnāpeṣṣaṇa) dañ / mi brtan (P; brten D) pa la brten (D; rten P) pas (*asthirāśrayatva) khyab (vyāpta) kyi / (gnas を「決定した」の意味に解して、「究極的殊勝状態に到らないことの決定した ...」)と西藏語訳者は考えて、否定詞 ma を付したのではないかと。(vyava-) sthitaprakarṣaṇiṣṭhābhāgitā の如き Skt. が想定される)。包摂関係は次の如くである。究極に至る殊勝性を有しないもの、即ち、程度の一定に制限された増進を有するもの (包摂される方) は、必ず、更なる努力に依存し、安定した拠り所を有しない (包摂する方)。この場合、論理的には、包摂する方は、「更なる努力に依存すること、または、安定した拠り所を有しないこと」であろう。程度の制限された増進を有するものは、更なる努力に依存することだけの場合もあり得るからである。例えば、程度の限定された増進を有する身体の跳躍は、身体という安定した拠り所を有するので、更なる努力に依存するだけである。

(38) TSP によると、菩薩は、悲愍の思いを有し、有情救済のために、涅槃に入らない。その菩薩が心の相統の拠り所となる。「即ち、来世 [の存すること] は証明されており、しかも、[心の] 本性となった大悲愍を有する菩薩達は、輪廻する限り、すべての有情を救済するために [世間に] 住する。それ故に、それら (菩薩) の拠り所に存する心相統は、極めて安定した拠り所を有する」(TSP1082,13-15: tathā hi paralokasya prasādhitatvād bodhisattvānām ca sātmiḥbūtamahākṛpānām āsaṃsāram aśeṣasattvoddharaṇāyāvasthānāt tadāśrayavartini cittasamtatir atitarām sthirāśrayā). そうした心相統が悲愍にとっての安定した拠り所となる。

(39) See PVṬ(R) 204b3 (= D 349a4f.): thugs rje (karuṇā) la sogs pa yid kyi yon tan (manogūṇa) rnam brtan pa la brten (D; rten P) pa nīd (sthirāśrayatva) dañ / slar 'bad pa la (D; las P) ltos (D; bltos P) pa med pa'i

以上の論難では、「悲愍は心の特殊性である」という定説者の論拠からは、「悲愍は制限なく増進する」という帰結を必ずしも証明できない、と他者は反論する。それに対して、プラジュニャーカラグプタは、悲愍が、単に心の特性 (manoguṇa) であることのみから、または、単に心の特殊性 (viśeṣa) であることのみから、悲愍に制限のない増進がある、と主張しているわけではない、と答える。その増進を導く特殊性には、上記の二つの限定が必要である、つまり、「任運に作用する自性である、即ち、更なる努力に依存しない」、及び、「安定した拠り所を有する」という限定が必要である、と主張する。悲愍はこうした限定の付された特殊性である、という論証因こそが、悲愍の制限なき増進を論理的に証明する論拠である、と説明するのである。以上を次の様に略記する。

悲愍：(更なる努力に依存しない自性でありかつ安定所依を有する特殊性たること → 制限された増進を有しないこと)

反論者は、跳躍が身体に属する特殊性であり、また、水の沸騰が水に属する特殊性である、という例によって、跳躍や水の沸騰が制限なく増進することはない如く、悲愍にも制限なき増進は不可能である、と反証するが、跳躍や水の沸騰は、たとい特殊性であるとしても、少なくとも上記の二条件のいずれかを欠いている。従って、他者の提示する反例は、悲愍の制限なき増進を反証する例にはならない。このように定説者は他者の反論を論駁するのである。

(106,15, MS. 44b2) しかし、更なる努力に依存する所の、そうした [跳躍などとしての] 特殊性 (viśeṣa) は、たとい増長する (vṛddhi) としても、自性ではない (asvabhāva) ので [つまり、任運に作用しないので⁽⁴⁰⁾、究極的に増進することはない⁽⁴¹⁾]。 [一方、ある努力によって] 形成された (特殊性) が [生じた後に更に存在する為に] 更なる努力に依存することがない場合には、[即ち、その生じた特殊性が任運に作用する場合には⁽⁴²⁾、その特殊性を形成したときの努力より後の] 別な努力は [以前の特殊性より更に高まった] 特殊性を作り上げる (viśeṣakṛt) であろう。

(*punaryatnānapekṣaṇa) phyir mthar phyin pa (*prakarṣaṇiṣṭha) ñid du 'gyur ro //。TSP では次の論証式が構成される。「およそ安定した拠り所に存するもの、しかも、一度或る形で涵養された特殊性であって、違害する条件のない限り、それ [自身] であるために更なる努力に依存しないもの、それらは、潜在形成力の [順次高まる] 特定な増進 [を受けること] により、殊勝の極みに至り得る、例えば、黄金の純化などの如し。智慧や悲愍なども、上述の特性を有する、[それ故に、殊勝の極みに至り得る] という [論証での論証因] は自性論証因である」(TSP 1079,19-22: ye sthirāśrayavartinaḥ sakre ca yathā kathamcid āhitaviśeṣāḥ santo 'sati virodhipratyaye tadbhāvāyāpunaryatnāpekṣiṇaḥ, te saṃskārotkarṣabhedena sambhavatprakarṣaparyantavṛttayaḥ, tad yathā kanakaviśuddhyādayaḥ. yathoktadharmāṇaś ca prajñākṛpādāya iti svabhāvahetuḥ).

(40) See PVP 59a7f. (= D 52b1): rañ bzin min phyir te de ñid rañ gi ñaṅ gi 'jug pa med pa ñid kyi phyir.

(41) See PVBhT(Ya) 172b4f. (= D 150b6): khyad par 'phel yañ mthar thug par 'phel ba ma yin no zes bya ba ni lhag ma'o //; PVV 47,23f.: viśeṣasya ... vṛddhāv api vyavasthitotkarṣataiva.

(PV II 123)

(106,18, MS. 44b3) 更なる努力に依存する(特殊性)は、確かに大いなる増長 (abhi-vṛddhi)⁽⁴²⁾ を得る [ことがある] としても、それでもその(特殊性)は [程度の制限されない作用を行う] 自性 (svabhāva) ではない。何故ならば、[他の] 原因の接近 (hetusaṃnidhāna) に依存する(特殊性)は、自性では有り得ないからである。というのは、任運に作用するもの (svarasavāhin) が、その様に [自性であると⁽⁴⁴⁾] 表現されるからである。それ故に [即ち、自性ではない故に⁽⁴⁵⁾]、それ(外的な更なる努力に依存する特殊性)は、増長したとしても、究極的に増長する (atyantaṃ vṛddhiḥ) わけではない。[それは] 恰も跳躍と水の沸騰 [が、それぞれ増長しても無限に増長するわけではない] 如くである。

更なる努力に依存するものは他の原因に依存するものであり、それは、任運に作用しないものである、それは、自性ではない。そうした特殊性は究極的には増長しない。一方、特殊性が最初の或る努力により生じ、それが、更なる人為的な努力に依存せずに、任運に作用する場合がある。その場合には、最初の努力と同類の努力が次々と連続して心に存する。それらは、同類の努力の流れであり、人為的に加える更なる努力とは別なものである。そして、その流れの上にある後続の努力は、順次高まる特殊性を作り上げている⁽⁴⁶⁾。そうした特殊性は究極的に増長することが可能である⁽⁴⁷⁾。後に言及される如く、この場合、悲愍に一層高まる特殊な状態が生じるが、それは、悲愍が全く新たなものとして、各時点に生じることを意味してはいない。悲愍は、それぞれ先行する時点の悲愍を質料因として、それと同類なものとして後続の時点に存している、つまり、その同類なものの流れとしての悲愍の存在は既に成り立っているからである。それぞれの時点での悲愍の修習は、後続の時点の悲愍の思いに対して、より鮮明となり強まることとしての明利性 (pāṭava) を与えるのみである⁽⁴⁸⁾。

(42) See PVV 47,25-48,9: **yadā** tu viśeṣa āhito nāpekṣeta punaryatnaṃ prāgutpannasyātmano lābhāya, api tu svarasavāhī bhavati.

(43) abhiṣvṛddhim MS. 44b3 (Tib 117b5: mñon par 'phel ba) により ativṛddhim R を訂正。

(44) See PVBhṬ(Ya) 172b7 (= D 150b7-151a1): **de skad** ces (D; **zes** P) bya ba ni raṅ gi ño bo ñid yin pa'i phyir ro //; PVṬ(R) 205a2 (= D 349b2): raṅ gi ño bo ñid ni raṅ gi ñaṅ gis 'jug pa (svarasavāhin) la tha sñad 'dogs pa'i (vyavahāra) phyir ro //.

(45) See PVBhṬ(Ya) 172b7 (= D 151a1): **des na** zes bya ba ni ño bo ñid ma yin pas na'o //.

(46) PVV 48,9f.: **yatno 'nyah** kriyamāno viśeṣakṛt (sic) yathābhyāsam uttarottaraviśeṣādhāyī bhavati (「[後に] 行われるであろう別な努力は特殊性を作り上げる、[つまり] 修習に応じて順次高まる特殊性を与える」)。

(47) See PVBhṬ(Ya) 172b6 (= D 150b7): de lta bur gyur pa'i khyad par ni śin tu (P; du D) 'phel bar 'gyur ro zes bya ba'i don to //.

(48) See PV II 130, PVBh 108,7f.; PVV 49,19-21.

以上、プラジュニャーカラグプタによる悲愍の増長論証の論理は次のようにまとめられる。特殊性は二種に分けられる、つまり、他に依存しない、かつ、安定した拠り所を有する特殊性と、それらのいずれかを欠くものとの二種である。心の特性としての、心の特殊性は、前者の特殊性である。およそそうした他に依存しない、かつ、安定した拠り所を有する、という二条件を有するものは、程度の制限された増進を有しない。この論理的包摂関係が論証の大前提である。悲愍などの心の特性は、将に、この二条件を有する心の特殊性である。それ故に、悲愍は、限定された増進を有しない、と帰結するのである。(本稿は文部科学省研究補助(基盤研究C)の研究成果の一部である)

略号

(以下に記されていない略号については、岩田2001、岩田2002、Iwata (Compassion) の略号を参照)

岩田 2001 岩田 孝「世尊の量性の証明の一解釈」『印度哲学仏教学』16 (2001) 44-74。

岩田 2002 岩田 孝「仏教論理学派による世尊の量性の証明における悲愍」『東方学』104 (2002) 125-140。

岩田 2007 岩田 孝「デーヴェーンドラブディによる悲愍増長の論証(上)」『日本仏教学会年報』72 (2007) (近刊)。

Iwata (Compassion) Takashi Iwata, "Compassion in Buddhist Logic, Dharmakīrti's Compassion Based on Prajñākaragupta's Interpretation", Proceedings of the Fourth Dharmakīrti Conference (forthcoming).

木村 1998 木村俊彦『ダルマキールティにおける宗教と哲学』東京 1998。

生井 1996 生井智紹『輪廻の論証』大阪 1996。

PVBhṬ(Ja) Pramāṇavārttikālakṣaṇakārikā (Jayanta): P 5720.

MS. manuscript

R Rāhula Sāṅkṛtyāyana 校訂のPVBhの刊本

{ MS. での消去

<> MS. での欄外における挿入

<> 補遺